

日独合作映画『新しき土』をめぐって（その4）

海老坂 高

松の家とラインゴールド（承前）

一九三五年（昭和十年）——

西銀座五丁目、酒場・ラインゴールドにわたしはウェイトレスとして働いていた。ここの主人はケテルといってドイツ人であった。店は午前十時から開店され、直輸入のドイツビールとドイツ料理を出す、レストラン兼用の酒場だった。客は日本人、外人半々で、各国大公使館員、商人、旅行者、日本の知識人、芸術家、軍人などいろいろだった。女たちはABCのドイツ名前で呼ばれ、チップ制度で働いていたが、収入は月百五十円程度で、まちまちの私生活をもっているに暮らしていた。¹

二〇〇四年まで銀座五丁目のドイツ料理レストランに名前をとどめていたケテルは、日本にドイツ料理を紹介した草分けである。一八九三年にハンブルクで生まれたヘルムート・ケーテル（Hellmuth Ketel）は、日本に定住した他の多くのドイツ人同様、第一次世界大戦時における捕虜として来日した。大戦中はドイツの巡洋艦エムデンの乗員であった。大正八年（一九一九年）、習志野での収容所生活が終わった後もドイツに帰らず、日本人女性と結婚し日本にとどまった。

ケテルがバー「ラインゴールド」を開いたのは昭和二年（一九二七年）のことである。その三年後にレストラン「ケテル」を開業した。

昭和三十一年に東宝が制作した瑞穂春海監督の白黒映画『ある女の場合』には、キャロー神父役で出演している。亡くなる五年前の事である。

防共協定の誼でドイツから来朝する有名人は、ほとんどこの店を訪れた。主人ゆかりのドイツ戦艦エムデンの乗組員は二十名近い大人数でやっ

てきた。ユニフォーム姿のままだったのは、ケーテルの来歴の関係だろう。ビールを飲み、美しい声でコーラスを披露した。またマーカス・ショウの芸人たちは「奇抜な派手な衣装で入れかわり立ちかわり毎夜のようにやって来た」。

この店で働いていた「わたし」は『『新しき土』を撮影に来たアーノルド・ファンク博士の一行』を記憶にとどめている。なかでもカメラマン、リヒャルト・アングストが印象に残った。「非常にヨーロッパ的美男子であった」という。² 「ラインゴールド」の年末年始は和洋折衷で、ドイツよりも賑やかだった。

クリスマスは三日三晩、内外人の客で賑わい、シャンパンは競争でボンボン飛び、テープは乱れ、ドイツマーチは鳴り響き、客も女たちもしたたか酔っぱらった。ふだんパパは女たちが酔うのを禁じていたが、この日ばかりは別だった。客の恋人の胸に抱かれて泣く「泣き上戸」も発見されたりして大笑いだった。・・・店で飲み明かした客人の中には、わたしたちといっしょに元旦を店の屠蘇と雑煮で祝う気楽な人もあった。わたしたちの中にはドレスを着替え、振袖を着る人もあって、パパをはじめ大森の本宅からママ（妻君は日本人だった）や三人の子供たちもやって来て、ボーイを入れて二十六、七名が店の前で例年の記念撮影をした。³

この回想記の語り手であるアグネスこと石井花子は昭和十年十月、彼女のその後の生涯を決定する人物とめぐりあう。リヒャルト・ゾルゲである。ゾルゲは花子をときどき「フレデルマウス」にも連れて行った。

「フレダーマウス」については、すでにジープルクの回想を紹介したが、内田百間の記述を補足しておこう。

百間は「東炎」の昭和十一年六月号から八月号にかけて『蝙蝠館』という随筆を連載している。⁴ 「蝙蝠館」とは、すなわち「フレダーマウス」である。その最終回に、元学生である満洲航空会社社員と連れ立って「蝙蝠館」へ飲みに出かけるくだりがある。ただし目当てはビールではなく、

高価なシャンパン（三鞭酒）である。

「近頃は外国為替の都合で、いろんな物の値段が狂つてゐると云ふ話だから」⁵、値段を確かめ、一番安いものを注文する。十円であった。今なら三万円ぐらいだろうか。ちなみに、一九三一（昭和六）年に制作された『キートンの恋愛指南番』のなかで、主人公のバスター・キートンがホテルでルームサービスを頼むシーンがある。シャンパンは\$二十。邦貨に換算すれば二十円である。

冷えたのがないので、すぐに氷で包んでもらう。冷えるまでドイツのビールを飲んで待つ。亭主のドイツ人をつかまえて、昔の同僚だった獨逸人の遺族の消息をきく。⁶

「昔の同僚だった獨逸人」とは、百間のドイツ語教師時代のことをさしている。この随筆が書かれた頃、百間はすでに職を辞し、不安定な文筆生活に入っていた。

「フレーダーマウス」は東京に暮らすドイツ人の希少な社交場であった。しかし、「日本人はほとんど誰もそこには来なかった」というジープルクの回想は正確ではないようだ。

さて銀座の電車どおりに面していたレストラン「ローマイヤ」にも、ゾルゲは石井花子をたびたび連れていった。「食料品を兼ねた狭い店」はほとんど外人客ばかりで占められていた。⁷すでに述べたごとく、「ローマイヤ」の店主アウグスト・ローマイヤ（August Lohmeyer一八九二—一九六二）もケテル同様、習志野の俘虜収容所から解放されたひとりである。レストランの開業は「ケテル」よりも遅く、昭和十二年のことである。前年に締結された日独防共協定による人事交流の増大が開業の背景にあるかもしれない。「ローマイヤ」のホームページ（www.lohmeyer.co.jp）によると、ハムやソーセージが九十銭から一円二十銭、ハンバーグステーキが一円、サーロイン・ステーキが一円八十銭だったという。谷崎潤一郎は『細雪』（昭和十八年）のなかで、このドイツ・レストランの名前を挙げている。

さて、オックスフォードで三年間勉強し、一九三〇年（昭和五年）に学位を得た西園寺公一によれば、ロンドンに「みやこ」という日本料理屋があったという。店主の奥さんはオランダ人で、その関係からか、ヨーロッパでは珍しい鰻が食べられた。たくあんも出していたが、料理は高価だった。⁸

山口青邨の『伯林留學日記』には、同名の「みやこ」という日本食屋の名前がよく登場する。ただしこちらはベルリンの店である。正月にはここで雑煮を食べている。「みやこ」の主人は中川といい、妻はドイツ人であった。⁹ 日本人ばかりでなく、東洋人もよく訪れたという。山口はシャム人を目撃している。¹⁰

正宗白鳥は、滞欧の印象記である「郷愁——伯林の宿——」を食べ物の話ではじめている。パリ滞在中、白鳥はほとんど毎晩、パンテオンのほとりの支那料理屋に通った。パリでは支那料理への関心が高く、その店はフランス人が多かった。彼らはなれない手つきで箸をもち、ときには珍妙な食べ方で支那料理に舌鼓を打っていた。

フランスのパンとコーヒーのうまさは格別だが、魚介類は日本のほうが滋味に富んでいる、というのが白鳥の結論である。

白鳥はベルリンではもっぱら日本料理屋に通った。名前は挙げていないが、「みやこ」かもしれない。そしてこの随筆を次のような印象的なエピソードで締めくくっている。ふとしたことから、当地に住む日本人医師と知り合いになり、食事によばれる。白鳥夫妻は、「かういふ機会に、その人の臺所を利用して、純日本料理を自分でつくらうと思立つて、私達は翌晩、約束の時刻に、牛肉や野菜や、米までも買つて其處へ行つた。』

ところが、予想外の事に、台所は「現代風によく整つて」おり、道具類も完備していたにもかかわらず、塩、砂糖、バター、醤油など、肝心の調味料が不足していたのである。

外來者に恣ままに煮炊されることなんか喜んでゐなかつた。パンに玉子くらゐで簡単に食事をしてゐると云つてゐたが、でも、たまには飯を炊いてゐるさうで、その残飯を温めて呉れた。¹¹

この日本人の食生活は日本の水準からすれば、質素を通り越して貧しい部類にはいるだろう。成瀬巳喜男監督の『そよ風父と共に』（昭和十五年）のヒロイン秀子（高峰秀子）は、銭湯の娘だが、ラブスター・コキイルやマカロニ・グラタンを養父（藤原謙足）のために作る。GNPはドイツの三分の一にすぎないが、日本には豊かな食文化の伝統が存在した。明治のはじめに世界一周旅行を企て、その途上に来日したボヘミヤの貴族コジェンスキーは日本の料理を賞めている。特に雉の味は、「うるさい美食家でもほめちぎるにちがいない」という。¹² 文化の力は必ずしもGNPとは比例しない。

ファンクが「記念帳」で言及している日本研究家リリー・アベグの研究書『やまと——日本民族の信仰』には、会席料理の写真が一葉載せられている。¹³ 畳の上に大小七枚の膳が据えられ、その上に、鯛の塩焼き、刺身、そしてコジェンスキーが味をほめた伊勢海老の揚げ物などが置かれている。縦九.五センチ、横十五cmの白黒写真では、日本人なら何とか判別ができるが、実物を知らぬ西洋人にとっては、ほとんど情報の名に値しない。

すでに述べたごとく、ファンクは映画の中で、大和家を訪れたゲルダに会席料理を体験させている。広々とした座敷に正座するゲルダの前には、次々とお膳が据えられる。ファンクは先の写真の詳細を確認するかのようになり、一品一品をアップで、ゆっくり追ってゆく。アベグの掲載写真にもいえることだが、これがカラーであったなら、印象は全くべつものになっていただろう。

さて、件の日本人医療士は、白鳥が帰国する間にドライブに誘ってくれ、「手製のサンドイッチ持参で」訪ねてきてくれた。彼は自家用車を所有していた。後に詳述するが、当時の日本では、ドライブはごく一部の上流階級に限られていた。ドイツは、モータリゼーションでは文句なしに先進国であった。しかしそれは必ずしも豊かさの象徴ではなかった。

ベルリンの日本料理屋は、もっぱら在留邦人を目当てにしていたが、オリンピックの終了後、邦人の数が減るとともに退勢に追い込まれたようだ。¹⁴ ブリア・サヴァランを生んだ隣国とは異なり、ドイツの食文化は

狭隘で柔軟性を欠いている。しかし美食の誉れ高いフランスでも、日本料理はまだ市民権を得るまでに至ってはいなかった。それにひきかえ東京でドイツ・レストランが賑わったのは対照的な現象といってよい。日本人は食文化においても自らの後進性を意識し、西洋に絶対的な規範を求めていたのであろうか。そうではあるまい。事情は逆であろう。コジェンスキーは、日本の料理人が自分たちの調理した西洋料理を、「ほんのわずかしか食べない」事実を確認している。「彼らは、自分用には自身の嗜好と伝統の味つけに従った料理を作る」のである。¹⁵ 美味求心の豊かな伝統があらばこそ、西洋料理は日本文化の土壌に見事に根付いたのである。

階級社会

玉川一郎によれば、昭和十年から十一年ごろ、鳥料理屋が東京のいたるところに「一円で食い放題」という看板を掲げた。どこも店は繁盛しているが、女中が生の肉をおきっぱなしにしない。「生のまま弁当箱につめてかえる不心得もの」がいたからである。¹⁶

当時、銀座交詢社の前に夜七時頃から店をだす「増寿司」という屋台があった。生きている蝦の皮をむいてにぎる。朝日新聞社会部記者、進藤次郎は「銀座で一番うまくて安い店」と激賞している。信念の弁護士、正木ひろしの『近きより』が紹介している話である（昭和十二年五月号）。¹⁷

『そよ風父と共に』では、主人公の養父は、娘の好きな洋食が苦手である。娘に連れられて銀座の洋食屋に入るが、ほとんど何も食べずに店を出て、娘には内緒で立ち食いのすし屋にひとりでかけこむ。食事の趣味は、当時の階級社会を正直に反映している。ブルジョア・知識階級は和食を敬遠するわけではないが、洋食はその階級のメルクマールとして意識されている。親子でありながら、女学校に通う娘は父親とは違う世界に住んでいる。養父との趣味のずれには、自分を棄てた大学出の実父との繋がりが暗示されている。

食事の趣味の違いは映画の趣味の違いにも重なっている。食事の後、娘に連れられて入った映画館で父親は居眠りをして寝ぼけてしまい、周り

の観客の失笑を買う。娘はドイツ語が話される音楽映画に興じているが、父親は退屈のあまり、寝入ってしまうのである。

川端康成は、昭和十年十月に讀賣新聞に連載した「成瀬巳喜男監督に映畫を聞く」の中で、強い口調で邦画を弁護している。

私は常に自國人によつて不當に辱められ、軽んじられ續けてゐる、祖國の藝術の身方である。日本映畫を見ぬことを寧ろ誇りとしてゐるかのやうな、いはゆる高級映畫ファンには、優秀な文化人よりも、淺薄な都會病者が多いやうに思はれる。¹⁸

川端は自國の現代文化に対して評価を下す能力に欠ける知識階級に憤っている。それははなはだ恥ずかしい事なのだが、このような傾向は今も続いているといつてよいだろう。邦画の蔑視は、邦画を好む階層への輕視と繋がっている。『そよ風父と共に』で秀子が義父と銀座に見にゆくのは「高級映畫」である。義父は上映中に寝ぼけて映画中の拍手につられて自分も拍手をしてしまい、周囲の観客に笑われるが、この笑いは嘲笑に近い。

親子の懸隔を映画の趣味で描くシーンは小津安二郎の『ひとり息子』（昭和十一年）にもみられる。田舎から上京して久しぶりに再会した老母を、息子は映画に連れて行く。これもドイツ映画である。製糸工場で身を粉にして働きながら、女手ひとつで育て上げた、かわいい息子。小学校卒業以来、離れ離れに暮らしてきた息子が今、傍らに居る。しかし老母は居眠りを我慢できない。

息子は旧制中学をでたものの、立身出世の夢破れ、夜学で数学を教えながら糊口をしのいでいる。貧困にあえぎながら、大都會の片隅でひっそりと暮らしている。老母をもてなす十円の金が工面できず、同僚から借金をする。貸家の襖には「GERMANY」と書かれたポスターが貼られている。欧州映画を観るのが唯一の楽しみなのだ。

息子の中学進学を強く勧めた小学校の大久保先生も、大志を抱いて上

京した。しかし今では一個五銭の場末のトンカツ屋の親爺に身をやつしている。

川端康成は『新潮』昭和十一年九月号に発表した「日記」の七月十七日の条に、「文科にも今日のやうな就職難はなかつた。私などにも、私立だが、専門学校の教師の口が二つもあつた」と記している。¹⁹ 生活破綻の恐怖におびえるのは貧農だけではなかつた。大宅荘一は『セルパン』昭和十二年五月号で、就職難のあまり大卒者が高学歴を隠して中卒者として就職活動をおこなっていると報告しているが、²⁰ 大卒者の就職率は五割そこそこ、就職難は深刻であつた。「浅薄な都會病者」になることができるのは、恵まれた、一部の人間に過ぎなかつた。

宮澤俊義は『セルパン』昭和十二年五月号の中で、特権階級から脱落しつつある今の学生が「功利的であることを餘儀なくされ」ていると指摘している。

以前は學生、ことに大學生といふものは一種の特権階級であつた。大學を出さへすれば、食ふには困らなかつた。いや、食ふに困らぬどころか、社會における一流の地位が彼らを待つてゐた。就職難などおもひもよらなかつた。このことは、たとへば、明治時代または大正初期に大學を出た人たちが現在どのやうな地位を社會の各方面で占めてゐるかを見ればすぐ分る。先祖傳來の田畑を賣りとばしてもいい。身を苦界に沈めてもかまはない。ぜひ息子を、あるひは兄弟なり戀人なりを大學に通はせたい。かう考へる父親や娘がその頃は少なくなつたやうであるが、これももつともな話である。大學生に「末は博士か大臣か」といふ洋々たる未來が約束されてゐる以上、大學教育を受けさせることはきはめて確實な投資であつたのである。

ところがいまはどうか。就職はおそろしくむづかしい。また就職はできても、經濟的に獨立することは中々容易でない。まさに「大學は出たけれど」である。²¹

小津安二郎の名作『大学は出たけれど』が発表され、世間の注目を集めたのは昭和八年のことである。『ひとり息子』にしろ、『そよ風父と共に』にしろ、学歴信仰の無残な結果を冷徹に浮かび上がらせることで、社会の閉塞状況を見事に描きだしている。このような鋭い社会批判をこめた映画は当時のドイツには存在しなかった。川端の邦画擁護は決して鼻根の引き倒しではない。

単純に学歴を積み重ねても、成功はもはやおぼつかない。そういう努力が報われる時代ではないのだ。『ひとり息子』は信州の製糸工場に戻った老母を映し出して終わる。老母の背景には大きな重い門がびったりと閉ざされている。苦しい境遇をぬけだす出口はない。庶民の一般的意識は世相の転変についてはいけない。正しいと信じた事がもはや時代遅れとなり、失敗を繰り返す。パラダイムの変化にいち早く気づき勝者となる事ができるのは常に少数者に過ぎない。

『そよ風父と共に』では、女学校に通う主人公秀子の前に、実父が現れる。自分を身ごもっている十八歳の母を棄てて姿を消した実父は、無事に大学を卒業し、今はひとかどの紳士になっている。実父の成功を後押ししたものは学歴以外の何ものかである。

島津保次郎監督の『光と影』（一九四〇年）には、大ブルジョアの食事のシーンが出てくる。

桂家ではヒロイン佐保子（原節子）の二十三歳の誕生日を祝う準備に忙しい。

広大なキッチンには、冷蔵庫とオープンが備わっている。テーブルには「s a h o k o」とかいた大きな誕生ケーキが用意されている。母のまさ子（英百合子）はオープンから鳥の丸焼きをとりだす。卵がまるのまま皿に載せられているのは、それがごちそうだからだろう。食堂では靴ばきは西洋流だが、ナイフは使わず、箸で食事をするところは和風である。

やがて祝宴が始まる。小さなグラス（ポートワイン）で乾杯したあと、大学教授の父、有作（汐見洋）はビールに切り替える。ビールを飲む習慣は、日本では階級にかかわらないようだ。『キートンの恋愛指南番』では、社

交界の花形に間違われた、バスター・キートン演じるところの、しがたい看板はりの主人公は、「シャンペン」の綴りが書けない。シャンペンではなく、ビールではだめかという、指南役の大ブルジョア、フレッド（ウォルター・メルル）は即座に却下する。

しかしドイツではアメリカとは違い、ビールにそのような厳密な階級コードは割り振られていない。一九三六年に高濱虚子がベルリンの日本学会で講演した折、別室にはサンドウィッチ、ビールが用意されていた。講演の終了後、日独協会会長ベンケ提督は、高濱虚子の息、池内友次郎にしきりにビールを勧めたという。

成瀬巳喜男監督『サーカス五人組』（昭和十年）では、片田舎のカフェ「クロネコ」で、都会からやってきたサーカス団員がビフテキならぬ「ビステキ」を注文すると、主人があわてて肉屋に走る。都会と田舎の落差を印象付けるシーンである。食文化は階級差よりも都会と地方の地域差をより大きく反映している。ちなみに「ビステキ」は三十五銭である。

高濱虚子の『渡佛日記』には、ベルリンのオペラ座で、幕間に、調理場からサンドウィッチを取り寄せるくだりがある。サンドウィッチは、当時の日本では、決して簡素なあり合わせの食事ではなかった。弁護士中村稔（昭和二年生まれ）の回想によれば、少年時代をすごした大宮の駅前に、三立軒という駅弁屋があり、朝早く、サンドウィッチの切れ端を袋に一杯、一銭、二銭で売っていたという。ときにはその切れ端にハムや辛子が残っていた。裁判官を父に持ち、昭和十九年に一高に入学した中村は裕福な階級に属したが、このサンドウィッチの切れ端が洋食体験のはじめだった。²² 洋食は敷居の高いものであると同時に、高価なものでもあった。ちなみに中村の父親は昭和十六年、尾崎秀実とリヒャルト・ゾルゲが逮捕された際に、東京地裁判事として予審を担当している。

当然の事ながら、ファンクが『新しき土』のなかで、日本の抱えるさまざまな問題に触れる事はない。しかし暗澹たる未来に絶望しているドイツ映画の若い愛好家は、映画の最後に映し出される、赤子を抱いた若く美しいヒロインを見たとき、大陸に翔ける夢を思い描く事ができただろう。映

画の公開までもない昭和十二年三月三十日の東京朝日新聞朝刊は、「新しき土へ五百人」という見出しで、山形、秋田、宮城、福島、長野、群馬の農村から選ばれた第三回満鉄鉄道自警村移民団員二百家族五百名が、二十九日午後六時十五分東京駅発の臨時列車で渡満したという記事を書いている。「新しき土」という言葉は、国家が用意した舞台へ向けて、早くも人々の夢を乗せて動き出していた。

モータリゼーション

実家に帰ってきた輝雄は農村地帯をオープンカーで乗り回す。ドイツではすでに「アウトバーン」（自動車専用道路）がさかんに建設されつつあり、一般国民向けの普及車（フォルクスワーゲン）の構想が進められていたことを考えれば、ドイツ人にとっては別段あやしむにたりないシーンである。しかし道路は舗装されておらず、標識もなく、どうみても自動車がいつも通行しているとは思えない。伝統的な作業衣に身を包み、裸足で田んぼに入るかと思えば、ジャケットをまとして颯爽と巨大なオープンカーを乗り回す輝雄の姿は、日本人から見れば、いかにも、ちぐはぐであり、リアリティを感じることはできない。

ヨーロッパでは自動車の大衆化が始まっていた。短距離のドライブどころか、旅程数日に及ぶ自動車旅行も普及していた。ベルリン滞在中、近郊ドライブを楽しんでいた隈部一雄は、ベルリンから十日に渡るスイス自動車旅行の体験記を『セルバン』昭和十一年六月号に発表している。観光都市チューリヒにはイギリスやフランスから沢山の自動車が蝟集していた。南独では「完備」した道路を移動する機械化師団を目撃し、「軍隊が自動車を使ふことは到底日本の比ではない」との感想をもらしている。またオートバイ隊が「七八十軒の高速度を出して活動して居る有様」に強い印象を受けている。²³ 日本ではまだ、騎兵学校で馬術教育が行われていた。

隈部の愛車DKWを製造していたアウト・ウニオン社は二万人を超す従業員を擁し、一九三六年の生産台数は四万八千九百台に達していた。日産自動車が商用車も含めて、わずか六千六百六十三台しか生産していない

時代である。ちなみに最大の生産台数を記録したのはオベルで、十二万台を越えている。オベルは前年十万二千台を生産して、世界八位にランクインしている。上位七社はいずれも米社である。この年、アウト・ウニオン社の花形ドライバー、ベルント・ローゼンマイヤーは三つのグランプリに優勝し、欧州チャンピオンに輝いている。彼は翌年、二つの世界記録を残すとともに、公道で時速四百キロ突破という偉業を成し遂げている。ヒトラーは専用車のメルツェデスを時速百七十キロで巡航させ、アメリカ車はついてこれないと豪語していたが、あながち虚勢ではない。整備された道路網、スーパーチャージャーで強化されたエンジンは驚くべき高速移動を可能にしていた。DKWのような小型乗用車も時速百キロがだせた。

山口青邨は『伯林留學日記』に、下宿の近くで起きた交通事故の見聞を書き込み、「この自動車はスピードが猛烈に速いんだからたまらない」という感想を添えている。²⁴ この日記が書かれた翌日、ベルリンでは恒例の自動車・オートバイレース「アーヴェス・レンネン」が開催された。シャルロテンプラッツとヴァンゼー間の一般道を使用し、ベルリン子の人気を集めていた。競争車の速度は時速二百八十キロに達した。

アウトバーンの総延長は一九三五年に百十二キロ、三六年に千八十六キロ、三七年には二千二十六キロと急速に拡大していた。輝雄が平原をオープンカーで疾駆する場面は、ドイツの観客向けのサービスであろう。しかしこのメッセージは彼我の違いがあまりに大きすぎて、日本の観客には伝わらない。車に言及した日本人の映画評はひとつもないのである。

(つづく)

引用・参考文献

東和商事合資会社社史

標準 音楽辞典 音楽之友社 1966

現代史資料40 マスメディア統制1 内川芳美解説 みすず書房 1973

資料 日本現代史9 粟屋憲太郎・小田部雄次編 大月書店 1984

別冊 太陽 子どもの昭和史 昭和10～20年 平凡社 1986

「文藝春秋」にみる昭和史 第一巻 1988

復刻版 サラリーマン 第20巻 不二出版 2000

復刻版 東洋経済新報 第292巻 昭和期Ⅱ 東洋経済新報社 2002

昭和の作曲家たち 太平洋戦争と音楽 秋山邦晴著 林淑姫編集 みすず書房
2003

芥川龍之介全集 岩波書店 1977-78

有馬頼寧日記-3 昭和十年～昭和十二年 尚友倶楽部・伊藤隆編 山川出版社
2000

百万人の世界文学15 母の肖像・東の風西の風 パール・バック著 村岡花子訳
三笠書房 1955

美を求める闘い ドーリス・ブルヒャルト著 西村正身訳 青土社 2003

日本浪漫派とナショナリズム ケヴィン・マイケル・ドーク著 柏書房 1999

キャバレーの文化史 ハインツ・グロイル著 岩淵達治・田辺秀樹・平井正・保坂
一夫訳 ありな書房 1983・1988

日本浪漫派批判序説 橋川文三著 講談社学術文庫 1998

武者修行世界をゆく 早川雪洲著 実業之友社 1957

ヒトラー・ユーゲント 平井正著 中公新書 2001

若き日の詩人たちの肖像 堀田善衛著 新潮社 1968

ヒトラーのテーブル・トーク 1941-1944(上) ヒュー・トレヴァー＝ローバー
解説 吉田八岑監訳 三交社 1994

わが闘争 アドルフ・ヒトラー著 平野一郎、将積茂訳 2001

花々と星々と(増補版) 犬養道子著 中公文庫 1974

回想のスメドレー 石垣綾子著 社会思想社 現代教養文庫 1987

- 人間ゾルゲ 石井花子 勁草書房 1967
- 総動員体制と映画 加藤厚子著 新曜社 2003
- 羊の歌 加藤周一著 岩波新書 1968
- 川端康成全集 新潮社 1982
- 河合榮治郎全集 社会思想社 1967-70
- 教養としての思想 河合榮治郎研究会 社会思想社 2002
- 映画ひとすじ 川喜多かしこ著 講談社 1973
- 短篇三十三と半自叙伝 菊池寛著 文芸春秋 1977
- 暗黒日記1 清沢洌著 ちくま学芸文庫 2002
- ジャポンスコ ポヘミア人旅行家が見た1893年の日本 ヨゼフ・コジェンスキー
著 鈴木文彦訳 朝日文庫 2001
- 古在由重著作集 勁草書房 1967
- 江戸・東京の中のドイツ ヨーゼフ・クライナー著 安藤勉訳 講談社学術文庫
2003
- 日本レコード文化史 倉田喜弘著 東京書籍 1992
- 近きより1 正木ひろし著 社会思想社 1991
- <日本の近代13>官僚の風貌 水谷三公 中央公論新社 1999
- 私と満州国 武藤富男著 文芸春秋 1988
- 昭和時代 中島健蔵著 岩波新書 1957
- 私の昭和史 中村稔著 青土社 2004
- 昭和史I 1926-1945 中村隆英著 東洋経済新報社 1993
- 中野重治全集 第十一巻 筑摩書房 1979
- 中学生のみた昭和十年代 中野卓編・著 新曜社 1989
- 西田幾多郎全集 第十四巻 岩波書店 1979
- ドキュメント昭和4 トーキョーは世界をめざす NHK?ドキュメント昭和4"取材
班 角川書店 1986
- 昭和和生活文化年代記1 戦前 三國一朗編集 TOTO出版 1991
- 戦前戦中を歩む 編集者として 美作太郎著 日本評論社 1985
- 技術開発の昭和史 森谷正規著 朝日文庫 1990

日独合作映画『新しき土』をめぐる(その4)

- 江戸っ子芸者一代記 中村喜春著 草思社 1983
- 回顧録「過ぎ去りし、昭和」 西園寺公一著 日本図書センター 2005
- 昭和不良伝-越境する女たち篇 斎藤憐著 岩波書店 1999
- 永遠のマドンナ 原節子のすべて 佐藤忠男監修 出版協同社 1986
- 大都会の夜 パリ、ロンドン、ベルリン—夜の文化史 ヨアヒム・シュレーア著
平田達治・我田広之・近藤直美訳 鳥影社 2003
- 回想の第三帝国[上] アレクサンダー・シュタールベルク著 鈴木直訳 平凡社
1995
- 渡佛日記 高濱虚子著 改造社 1936
- <日本の近代12> 学歴貴族の栄光と挫折 竹内洋著 中央公論新社 1999
- 随筆 西歐藝術風物記 竹内勝太郎著 芸堂 1935
- たべもの世相史・東京 玉川一郎著 毎日新聞社 1976
- 私が歩んだ道——滞欧二十年—— 田中路子著 大空社 1999
- ニッポン ブルーノ・タウト著 森俊郎訳 講談社学術文庫 1991
- 日本報道三十年 ヘッセル・ティルトマン著 加瀬英明訳 新潮社 1965
- トヨタのあゆみ トヨタ自動車工業株式会社 1978
- 中華電影史話 一兵卒の日中映画回想記 1939-1945 辻久一著 清水晶校註
凱風社 1987
- 甘粕大尉 角田房子著 中公文庫 1979
- 歐米大陸遊記 鶴見祐輔著 大日本雄辯會講談社 1933
- 新輯 内田百閒全集 福武書店 1987
- 戦時下日本のドイツ人たち 上田浩二、荒井訓著 集英社新書 2003
- モダン東京案内 海野弘編 1989
- 証言——日本洋楽レコード史(戦前編) 歌崎和彦編著 音楽之友社 1998
- 山田耕筰著作全集 岩波書店 2001
- 伯林留學日記 上 山口青邨著 求龍堂 1982
- 幻のシネマ満映——甘粕正彦と活動屋群像—— 山口 猛著 平凡社 1989
- 哀愁の満州映画 山口 猛著 三天書房 2000
- 昭和東京私史 安田 武著 朝文社 1994

- 僕の昭和史 I 安岡章太郎著 講談社 1984
- Arnold Fanck: die Tochter des Samurai. Berlin 1938
- Karlheinz Wendtland: Geliebter Kintopp. Sämtliche deutsche Spielfilme von 1929-1945 mit zahlreichen Künstlerbiographien Jahrgang 1937 und 1938.2.überarbeitete Aufl.Berlin
- Lily Abegg: Yamato - der Sendungsglaube des japanischen Volkes. Frankfurt a. M. 1936
- Janine Hansen: Arnold Fancks *Die Tochter des Samurai*. Nationalsozialistische Propaganda und japanische Filmpolitik. Wiesbaden 1997
- Friedrich Kießling(Hrsg.): Quellen zur deutschen Außenpolitik 1933-1939.Darmstadt 2000
- Klaus Kreimeier: Die Ufa-Story. Geschichte eines Filmkonzerns.München/Wien 1992.
- Emily S. Rosenberg: Spreading the American Dream. American Economic and Cultural Expansion, 1890-1945.New York 1982
- Hans C. Graf von Seherr-Thoss: Die deutsche Automobilindustrie: eine Dokumentation von 1886 bis 1979.2. korrigierte u. erw. Aufl.Stuttgart 1979.
- Sibylle M. Sturm, Arthur Wohlgemuth: Hallo? Berlin? Ici Paris! Deutsch-französische Filmbeziehungen 1918-1939.München 1996.
- Friedrich v. Zglinicki: Die Wiege der Traumfabrik. Von Guckkästen, Zauberscheiben und Bewegten Bildern bis zur UFA in Berlin.Berlin 1986.

注

- ¹ 「人間ゾルゲ」、1ページ。
- ² 同上、34ページ。
- ³ 同上、9ページ。
- ⁴ 百閒全集第六巻、69 - 79ページ。再録の際に改められた『三鞭酒』の表題で収載。
- ⁵ 同上、77ページ。
- ⁶ 同上、79ページ。
- ⁷ 「人間ゾルゲ」、8ページ。
- ⁸ 「過ぎ去りし、昭和」、81ページ。
- ⁹ 昭和十三年四月三十日の条。結婚して六年という記述も見える。
- ¹⁰ 昭和十二年十二月二十一日の条。
- ¹¹ 正宗白鳥全集第十一巻、50ページ。
- ¹² 『ジャポンスコ』、46ページ。
- ¹³ 48ページ。
- ¹⁴ 『伯林留學日記』、昭和十三年三月一日の条。
- ¹⁵ 『ジャポンスコ』、46ページ。
- ¹⁶ 『たべもの世相史・東京』、163ページ。
- ¹⁷ 39ページ。
- ¹⁸ 川端康成全集二十七巻、115 - 116ページ。讀賣新聞朝刊十月六、八、九日に連載。
- ¹⁹ 同上、131ページ。
- ²⁰ 98ページ。
- ²¹ 「むかしの學生といまの學生」、10ページ。
- ²² 『私の昭和史』、20ページ。
- ²³ 57ページ。
- ²⁴ 昭和十二年五月二十九日の条。